

エンカウンター・グループの教育的意義

“大学生の心の成長”を促進する場として

田中 梅野*

1 このセミナーの特徴

(1) 授業の一環であること

セミナーは教養教育の授業の一環として、特別集中講義<グループ・セミナー「集団の中での自分探し」>の名称で企画されたものである。参加資格はこの授業の登録者であり、参加することで単位が取得できる。今回初めての試みであるこの企画の意図は、他者との出会いのなかで、自らを見つめ、他者・社会との関わりや生き方を考える場を提供することである。

(2) 時期

1998年、9月28日～30日までの3日間、小豆島の余島で行われた。学生にとっては、夏休みの最後の3日間である。タイミングとして、バイト・教育実習・企業のインターンシップ等での夏の疲れを取りたい、しばらく大学から離れていた頭と気持ちを大学に戻すウオーミングアップ、後期に向けてのエネルギー補給等の参加動機につながる。

(3) 恒例のセミナーとの違い

これまで十数年間、毎年3月に、同じような形でのグループセミナーが、保健管理センター主催で行われてきた。参加者は、教養教育「心の健康」等の授業を受けて、カウンセリングやカウンセラーに興味を持ったり、普段から多少なりとも保健管理センターとのつながりのある学生が多い。また、こちらは単位は出ない。年によって特色があるものの、参加者は自らの、あるいは他者の「こころ」に触れる体験が、当然あるものとして参加している。もちろん初めての学生にとっては、不安も期待もある。

ひるがえって今回のセミナーは、参加するのに不安はあっても、その質が違う。「グループって一体どんなものか、何をするのか全くわからない。」という不安である。心のレベルとでもいおうか、そんなものの違いがある。スタッフは、容易に傷つきやすいかもしれないという、この点に注意を払っている。

(4) 出会いの不思議

集合は、初日の朝8:30出港のフェリー乗り場である。時間になっても来ない学生が何人かいる。ある文系学部男子1年は、今まさに乗ろうとした瞬間、乗客とフェリーをつなぐ足場？が、陸地から離れて、フェリーの後ろに上がっていき、取り残された。そこへ数分後に理系学部男子1年が、バイクに乗ってやってきた。初対面ながら互いに遅刻組と認識して声をかけ、高速艇乗り場まで一緒に歩いて行った。高速艇で先回りして、土庄港で待っていた彼らは、この間にどんな会話をしていたのだろう。

* 香川大学保健管理センター非常勤カウンセラー

余島での全体会でのグループ分けでも、彼らは同じグループになることを希望し、3日間を、共に語って過ごした。筆者には、彼らは一生の間柄になるのではないかと思える。理系学生は、「この出会いがなければ、自分はフェリー乗り場から帰っていた。」と言っていた。

2 学生から見たスタッフはどういう存在か

学生の数は2グループで14名、1グループ7名（男子2名女子5名）に、男女1人ずつのスタッフが加わって、1グループは9名である。スタッフは、2名とも、学生の父親・母親の年齢である。彼らには叔父さん・叔母さんのイメージであろう。

グループでのスタッフの精神的位置付けは、大学での講義やゼミでの、教官と学生との関係とは大きく違っている。グループでは、教官でなくスタッフであり、学生でなくメンバーであり、精神的には同じ地平に立っている。権威・操作・自己顕示とは逆の位置にいる。参加後のアンケートによると、この点は、おおむね達成できていたようである。

しかし、話しを「突っ込まれた」と感じている学生が、2、3人いた。同じ場面を共有していながら、同じことを感じている人が1人ではないということは、その場ではその感じ方は客観性を帯びている。筆者は突っ込むつもりはないのに、突っ込まれたと感じているところに、ずれがある。普通、突っ込まれて応えられないと、突っ込まれたほうは、応えられなかったという印象が残り、自己を否定的に見てしまう。これではグループの主旨に反する。筆者は、自然で素朴な質問をしたのだろうか？ いや100%そうとは言いきれない。そこになにかがあるのだが、それは次節で考えたい。

3 スタッフから見た学生像

1年女子で、中学からずっと同窓という仲良し2人がいた。はじめの全体会でのグループ分けで、別のグループのほうがいいのでは？ という意見も出たが、本人たちは敢えて同じグループになることを選んだ。初参加で、それがどういう意味を持つのが分からなかったのであろう。が、ここではメンバーの意志は最大限尊重される。グループセッションでも、2人はいつもびたっとくっついて、グループの話の中に入ってこず、ひそひそと自分達2人の世界を作り上げて、そのなかでおしゃべりしている。

話題は、靴やジーンズのサイズ、買い物、友達のうわさ、怪我の話、etc……。比較的小さな教室での講義やゼミで、こそこそと私語をして平気な学生に対して、目障りでもあり耳障りでもあると感じる教官もいると思うが、ちょうどそれと同じような状況である。それならまだ眠っていてくれるほうがましであろう。グループでは、この2人の行動に、どう対応していいのか戸惑いがあった。どこかお喋りが気になって、無視して自分達のグループを続けることもできないし、かと言って2人は、グループに話題提供もできない。ジレンマである。2人と他のメンバーの間に不協和が生まれてくる。

そのうちに、スタッフに、「そうしているのはどんな感じがするものか（良い悪いではなく）。」と問われて、1人が「自分は沈黙にどうしても耐えられない。沈黙が始まると、どうしても自分が喋らずにはいられない。かといって、話のなかにも入っていけない。」と告白した。もう1人は、それに付き合えねばと思うらしい。筆者は、それならグループに向かってそう言えばいいし、自分が話題提供できなければ、誰かに振ればいいと思うのだが、そういう発想はないらしい。メンバーも、2人

に指摘すればいいのだが、それもしない。

筆者は、この事態を、自己表現ができない、またはその勇気がないのではなく、表現できるだけの感情・意見を持ち合わせていないのではないかと思えてきた。大学生になるまで、自分が感じることを自分の感情と捉え、意見や考えを持ち、適切に表現するすべを知らないばかりか、自分の感情、考えについて意識した経験すら殆どなしの状態だったのではないだろうか。筆者は、その場で実際にその状態を見た驚きとショックで愕然としていた。大人なら、状況を把握し、状況にフィットした行動が取れるはずだという思い込みがあり、参加者はまだ社会人ではないとはいえ、大学生なら少しくらいはできるだろうという、期待があったが、その期待は見事に打ち砕かれた。考えるとは自らに問いかけ、自ら答える心の作業なのだが、この場で、そのお手伝いができるなら少しでもしたいという気持ちが、前節の突っ込みとして出たのではないかと自己分析した。

しかし、彼女らも、セッションを重ねていくうちに、だんだんグループがどういうものかが分かってきたようで、全体の中での自分が見えてきだした。理屈ではなく体験からの成長である。近頃の若者は、考えがないと言われることがあるが、案外そうでもない。彼らは考えたいのである。しかしこれまでにそのチャンスと場がなかったのであろう。

ある男子学生が、「特に仲良くしている友人の親父が、ガンであと1ヶ月ほどの命と言われた。そんな友人に、自分はどのような言葉をかければいいのだろう。大黒柱を失うので、経済的にも成り立たなくなるかもしれないと言う。このセミナーが終わったらそいつに会うことになっている。それで悩んでるんだ。」と話したときには、<死>や<命>について、身内の死の経験などから各自の意見が出た。ここでは例の2人も話に乗ってきたのには驚き、嬉しさを感じた。グループ全体で、一つの事を考え、語り、傾聴し、共感し、影響し合い、互いに深まり合うという独特の雰囲気を楽しむことができた。これが「グループ」の醍醐味ともいえるものである。

残念ながら、この話しはこのセッションだけで、次の日に続きを話し合うということにはならなかった。重い話題に再度向き合うだけの度量が、まだついていないということなのだろう。今しばらく彼らの成長を待たねばならない。

4 学生の話しから浮かび上がる教官像

参加者は1年から4年まで各学年いたので、あるセッションでは、教官と単位の取りやすさの話題で盛り上がった。単位は極端に取りやすくても、極端にとりにくくても人気がない。筆者は少し引いたところで、傍観者的に聞いていたのだが、メンバー達は意識的にも無意識的にも、教官の人間くささの度合いを感じているようだ。授業で伝わるのは人間性で、これは今も昔も変わらない。誠意を持って授業に臨む、その姿勢に好意を持ち、欺瞞への感受性は鋭いと感じた。筆者のカウンセリングにも全く同じことが言えるので、襟を正した次第である。

5 おわりに

今回のグループセミナーは、一つの島に、自分達のグループだけが過ごしているという贅沢な環境に恵まれた。日常の空気から完全に離れて、寝食を共にしながら、大いに遊び大いに語りあうという体験を通して、普段ではなかなか集中して考えられないことを考え、確認し、他者を見て、同時にそこに映る自分を見た。この体験は、今すぐ目に見える形でないかもしれないが、各人各様に、

心に残るものであろう。

筆者自身で言えば、これまで、問題に正面から向き合っていないことや、なにかしらただらだらしていることには、時にイライラを感じることもあった。そういう人を受容するのに、困難を覚えることもあった。それが筆者の弱点だという認識は持っていた。今回のセミナーで、この弱点に正面から向き合わざるを得ない経験をして、鍛えられた。イライラの度合いがこれまでより少なくなった。自分がイライラしてしまっていて、スタッフの「彼女達も少しは、グループと言うものがわかってきた様子だ。」という視点で見ることを、その時点では忘れていた。この点で成長させていただいたのは、ありがたいことで、それに気づかせて下さったスタッフに感謝である。